

湯の丸高原におけるツツジの保護

湯の丸高原の草原では、人間の活動により、希少種や絶滅危惧種も含む多くの動植物が生息する環境が作り出されている。気候変動の影響がより強く意識されるようになった現在では、人間の活動はすべて生息地の損失や破壊につながると考えられがちだが、実際はもっと複雑な事情がある。

湯の丸高原はもともと森林地帯であった。20世紀初頭の牧畜農業ブームのあおりを受け、森林の多くが伐採され、土地が切り開かれて 300 頭の馬、牛、羊が放牧された。なだらかな傾斜は家畜の放牧に適していた。しかし、レンゲツツジは他のツツジ科の植物と同様に有毒である。動物たちはレンゲツツジを避け、代わりに他の競合植物を食べていた。

その結果、毎年 6 月中旬から 7 月初旬にかけて、赤みがかったオレンジ色の花を咲かせるレンゲツツジの群生地が広く形成されるようになった。レンゲツツジの花びらは通常の 5 枚ではなく 2 枚から 8 枚あり、標高が高くなるほど鮮やかな朱色になる。湯の丸山（2,101m）の山頂は、中部地方で標高が最も高いレンゲツツジの群生地であり、観光名所としてさらに注目を集めている。最も多く咲いていた時期には、90 万本以上のツツジが湯の丸高原でみられたと考えられている。1956 年、レンゲツツジはその数と分布、花の色、そして湯の丸の生態系との関わりから、保護種に指定された。

1975 年以降、湯の丸高原の商業的放牧は衰退の一途をたどった。牛の放牧がなくなったことで背の高い下草や樹木が再生し、徐々に森林化が進んだ。照葉樹林の増加に伴い、レンゲツツジは日光を求めて競い合うようになり、その数は 78 パーセント減の約 20 万本にまで減少した。

草原の消失が保護対象のツツジの消滅につながることを懸念した住民たちは、ツツジの保護を目的としたボランティア団体を結成した。現在では、保護目的のみで飼育されている 30 頭の牛の力も借りて、約 30 名のボランティアが 272 ヘクタールの草原の保護に重要な役割を果たしている。ボランティアたちは、カラムツやズミなどの背の高い植物を除去し、残りの部分を牛に食べさせる。現在、ツツジの数は大学の継続的な研究の一環として厳重に調査されており、60 万本以上のツツジが湯の丸高原全体で見られるようになった。